

『古事記』のなかのスサノヲ

皇祖神としてのスサノヲ

権 静*

(e-mail : shirijung@hanmail.net)

目 次

序論

本論

1.ウケヒの場面

2.兄妹婚

3.ムスヒのエネ르기

4.国譲り

結論

序論

アマテラスとスサノヲは、今まで両極端の性格を有する神として知られてきた。姉のアマテラスは創造的で光を代表する神として、弟のスサノヲは破壊的で闇を代表する神として認知されてきたのである。このような神の性格は『古事記』の中でよく表れている。なかでも弟神であるスサノヲが母のいる根の国を恋しがり、父から命された海原の統治を怠ったため追放されたとき、姉のアマテラスにひまごいに行ったときの一話によく示されている。

高天の原に上ったスサノヲは自分が悪意ではなく善意を持っていることを立証するため、アマテラスとウケヒを行った結果、姉に勝ったので有頂天になり乱暴を働いてしまう。その様子を『古事記』から引用すると次のようである。

しかくして、はやすきのをのみこと、あまてらすおほみかみにまをさく、「我が心清く明きが故

* 배재대학교 교양학부 전임교수

に、我が生める子は、たわやめを得つ。此によりて言はば、自ら我勝ちぬ」と云ひて、勝ちさびに、あまてらすおほみかみの菅田のあを離ち、其の溝を埋み、亦、其の大嘗を聞きめす殿にくそまり散らしき。1)

このようなウケヒの場面にスサノヲの破壊的な性質がよくあらわれている。それに比べアマテラスは乱暴な弟の悪事に対して寛容であり、まさに女神としての性質を代表している。しかしその寛容さもスサノヲが「あまてらすおほみかみ、いみはたやにいまして、かむみそをおらしめし時に、その服屋の頂をうかち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて、おとしいたる時に、天の服織女、見驚きて、桧に陰上をつきて死にき」のような悪事をはたらいたときには限界に達し、天の石屋にこもってしまう。その結果、高天の原および葦原中国はすべて暗闇と化することになる。

この一話からアマテラスが光を代表する存在であるにたいして、スサノヲはそれとは反対に闇を代表する存在であることが分かる。二神の性質についての考察は多くなされており、そのなかの代表的なものを紹介すると次のようである。

アマテラスは太陽神、対してスサノヲはいきおいの激しい神である。日本神話はこの二神の対立を軸として物語を進める。たとえば、『日本書紀』ではスサノヲをゆうかんだけれども残忍だとか、性格が悪くて怒りっぽいとかと語り、反対にアマテラスは「人となり、明麗」とかたり、「ひかりうるわしく、くの中に照り徹る」とする。2)

スサノヲの性格およびそれにもとづく行為について、古事記や日本書紀の伝えるところによれば、徹底的に「荒」ということで一貫していると言える。大宜津比売の殺害、八股遠呂智の退治、大穴牟遲神に対する試練、など、ことごとく「荒」の概念によって包括することができる。3)

このような二神の性格により、アマテラスは天から地上を含む秩序を担う神として、皇室の神聖な起源と国土の統治権を有する正当性を持つ。スサノヲは葦原の中国をつくりおえ完成させたが、皇室の神聖な起源と国土に対する統治権を正統的に有していなかったため、国を譲り渡さなければならなかった。しかし、はたしてスサノヲが国の統治権をニギに譲ったのは、本当に正当性を有していなかったためなのか。スサノヲの荒ぶる性質に焦点が当てられ、アマテラスとは比較にならない存在として見られてきたため、はじめからアマテラスの子孫に国を譲るのが当然視されてきたが、本当にスサノヲは正当性を有していなかったために国

1) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.145.

2) 中西進 『日本神話の世界』、平凡社、1991年、p.40.

3) 金子武雄 『古事記神話の構成』 桜楓社、1976年、p.59.

を譲ったのか。

本論で述べたい要点はオシホミミは、天と地をつらぬく秩序を有する存在であるが、直接国を統治しない象徴的な存在であるアマテラスを母とし、アマテラスに比べ尊厳性においてはおとろが、すさまじい力を有し実質的に葦原中国を造りおえたスサノヲを父としているのではないかということである。スサノヲが苦勞の末、造り終えた葦原の中国をオシホミミの子供であるニニギに譲り渡したのは、彼がアマテラスの正当性を背負っているからでもあるが、オシホミミがスサノヲにとっても他人ではない息子だからではなかったのか。

それではこのような論点を導くに至った論拠はどこにあるのか、次の四つの論点で説明していきたいと思う。

本論

1 ウケヒの場面

スサノヲが根の国に行く前に、姉のアマテラスに暇ごいをしに高天の原に上る。しかし、アマテラスは弟の荒々しい性質をよく知っていたため、スサノヲが高天の原に上がってくるのが善良な心からではなく、自分の国を奪うために来るのだと思ってしまう。スサノヲは誤解を解くためにウケヒをして子を生むことを提案する。ウケヒとははじめに誓約を立て、特定のことを行い、その結果によって神意をうらない、これによってことの是非・吉凶・黑白などをだんていすることを言う。

アマテラスはスサノヲのつるぎをかみ砕き、その剣から三人の女の子を得る。スサノヲはアマテラスの髪にまいてある珠をかみ砕き五人の男の子を得る。そしてスサノヲは自分のつるぎから生まれた子が心やさしい女の子だから自分がウケヒに勝ったと宣言するに至る。その場面を『古事記』から引用すると以下のようなものである。

故爾くして、各天の安の河を中におきて、うけふ時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命の佩ける十拳の剣を乞いわたして、三段に打ち折りて、ぬなとももゆらに天の真名井にふりすぎで、さがみにかみて吹きうつる気吹き狭霧になれる神のみなは、たきりびめの命。亦の御名はさよりびめの命と言う。次に、たきつひめの命。速須佐之男命、天照大御神の左の御みづらにまける八尺の勾玉の五百律のみすまるの珠をこひわたして、ぬなとももゆらに天の真名井に振りすぎで、さがみにかみて、吹きうつる気吹き狭霧になれる神のみなは、正勝吾勝勝速日天忍穂耳命。あまつひこねのみこと。4)

4) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.134.

このウケヒの場面で注目したいのはお互いのものをかみ砕き、そこから子供を得たということである。後に皇祖となるオシホミはアマテラスの勾珠から生ったためアマテラスの子供とされるが、けっして勾珠がひとりでに子供と化したわけではない。つまりスサノヲの協力（さがみにかみてふきうつる）なしではオシホミは生まれ得なかったのである。ここの「ウケヒ生み」は、母体から生まれる胎生でもなければ、一つの物が他の物に変ずる化生とも言えないところがある。これには生む意志と方法とがあるからである。そして物実となった玉と剣はもとよりのこと、これをすすいだ水もふいた息も、すべていわゆる呪物であり、生んだ行為は呪術である。オシホミはアマテラスの勾珠にスサノヲの神聖な力が加わった結果生まれた存在であり、だからこそ葦原の中国を統治するに相応しい資格を備えた存在なのである。

2 兄妹婚

アマテラスとスサノヲが夫婦であるとは『古事記』に明記されていないが、イザナミとイザナギの兄妹婚の話と類似した要素もっていることから、その事実を推定することができる。

イザナミとイザナギは陰陽の性質を有する神としては、はじめて神々を生んでいく。イザナミとイザナギは夫婦の交わりを通じて十四の島を生み、次に三十五柱の神たちを生む。しかしイザナミは火の神であるかぐつちの神をうむ途中に死んでしまう。そのイザナミを恋しがついてイザナギは黄泉の国まで会いに行くが、イザナミの「我をな視たまひそ」という言葉に反し、その姿を目にしてしまう。余りもの恐ろしさに逃げ帰ったイザナギは、「吾はいなしこめ、しこめき穢き国に至りてありけり。故、吾は御身の禊をせむ」といいながら、身体を清め始める。

その結果、生まれたのがアマテラス、ツクヨミ、スサノヲである。アマテラスは左の目から、ツクヨミは右の目から、スサノヲは鼻から成り出る。イザナミは既に黄泉の国に行ってしまった後なので、この三貴子の誕生には直接関わっていない。そのためイザナギ一神の力によって生まれた神々であるはずである。それにもかかわらず三貴子の一人であるスサノヲはイザナミを母親と認めているのである。この事実はイザナギから海原の統治を命されたスサノヲが母親の恋しさあまり、自分の任務を怠っている様子からうかがい得る。その様子は以下のようにある。

故、各依し賜ひし命の随に知らしめせる中に、速須佐之男命は、命せられし国を治めずして、やつかひげ心の前に至るまで、啼きいさちき。そのなく状は青山を枯山の如くからし、河海は悉く泣き乾しき。ここをもちて、あしき神の音は、さばえの如く皆満ち、万のものの妖は、悉く発りき。故、イザナギの大御神、速須佐之男命にのりたまひしく、「何のゆえにか、汝が事依さし国を治めずして、なきいさちる」とのりたまひき。爾くして、答へてまをししく、「僕はははが国の根之堅州国にまからむとおもふが故に、なく」とまをしき。⁵⁾

青々とした山を枯木の山に、河や海の水が乾し上がるまでに泣くスサノヲの様子から母親を恋しがる心がどんなに強いものか知ることができる。吉田敦彦は、これと類似したことが「誓約による子生み」によってアマテラスの長子となった皇祖のアメノオシホミの命に関してもいえると指摘している。

アマテラスはオシホミを寵愛し彼に葦原の中国の統治を任せようとする。『古事記』によると次のようである。

天照大御神の命以て、「豊葦原千秋長五百秋水穂国は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命のしらすむ国ぞ」と、言因したまひて、天降しき。是に、天忍穗耳命、天の浮橋にたたしてのたまはく、「豊葦原千秋長五百秋水穂国はいたくさやぎてありなり」と、のらして、更に還り上がりて、天照大御神にまおしき。⁶⁾

以上のようにアマテラスはオシホミが葦原の中国の統治者だと宣言する。しかし、オシホミは母神であるアマテラスから委託された使命を果たさず、葦原の中国がまだ平定されていない騒がしい国であるということを理由に高天の原に戻ってしまう。これを聞いたアマテラスは次々に使者の神を中国に派遣して、スサノヲの子である大国主に国を譲らせ、障害が排除された中国にもう一度オシホミを降らせようとする。しかし、オシホミは生まれたばかりの自分の息子のホノニギの命を自分の代わりに降らせることをアマテラスに承知させ、自分は母のもとを離れず高天原に居残ることになる。その様子は以下のようである。

しかくして、天照大御神・高木神の命以て、太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命にのりたまひしく、「今、葦原中国を平げおはりぬと白す。故、言依し賜ひし隨に、降りまして知らせ」とのりたまひき。爾かくして、その正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の答へて白ししく、「僕が降らむとしてよそへる間に、子、生まれいでぬ。名は天迹岐志国迹岐志天津日高日子番能迹々芸命、此の子を降すべし」とまをしき。

オシホミはこのようにアマテラスとの離別を強制されそうになると、そのたびに様々な口実を申し立て、ついに最後まで母神の近くから離れず、「中国を統治せよ」とのアマテラスがオシホミに課した使命の遂行を回避し続けた。オシホミのこのような態度には母を激しく慕い続けて「海原を知らせ」というイザナギの命令に従わなかったスサノヲの振る舞いと明らかに符合する点が見られる。父親の身体から誕生したスサノヲとウケヒによる子生みの結果生まれたオシホミとの共通点である。⁷⁾この説によると、イザナギ一神で生んだスサノヲがイザナ

5) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.118.

6) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.258.

7) 吉田敦彦 『日本神話の特色』 青土社, 1989年, p.75.

ミを母と見なし、イザナミを恋しがり、父神から命された海原の統治を拒み続けるところと、姉弟がお互いの持ち物から生みあった「ウケヒによる子生み」の結果、生まれたオシホミが母であるアマテラスの側を離れたがらないところに酷似した共通点がある。そこでアマテラスがオシホミの母神であるならば、スサノヲはオシホミの父神と見られるのではないかという論点について論じたい。それはスサノヲが父から命じられた海原の統治を拒否するところと、オシホミが父であるスサノヲが統治している中国の統治を拒否するところに共通点が見られるからである。ここでイザナミ・イザナギとアマテラス・スサノヲの子生みを図式化してみると以下のようである。

イザナギの力＋イザナミのいる黄泉のくから得た穢れ→三貴子の誕生

スサノヲの力＋アマテラスの持ち物である勾玉→オシホミの誕生

このふたつの子生みは、直接的な身体の触れ合いがないという点で、普通の人間の親子関係とは違いを見せるが、皇室の神聖な起源を語るために普通の人間とは違う方法で子を生む必要があったのではないかと思われる。

3 ムスヒのエネルギー

スサノヲがオシホミの父神なら当然スサノヲもアマテラスと同様に皇祖神と見なさなければならぬ。アマテラスは日神としてイハトごもりの一話からわかるように、地上を含む天地の秩序をつかさどる神として皇祖神に相應しい存在であった。さらにアマテラスはオシホミの降臨の際に、コトムケから降臨にいたるまで一貫して高木ムスヒと並称されており、ムスヒのエネルギーを被っているかのように見える。アマテラスはムスヒにささえられ、ムスヒに導かれてあり得るのである。つまりムスヒのエネルギーがアマテラスをも含めたすべてを導いていくといえる。これと同様のことがスサノヲに関してもいえるのではないだろうか。スサノヲの場合もムスヒの力によって導かれているのでアマテラス同様、皇祖神としての資格を備えていると思われる。その詳細はつぎの通りである。スサノヲの子であるオホクニヌシが国作りを行うとき、助力してくれたスクナビコ神はカムムスヒの子であり、カムムスヒはその事実を確認しつつスクナビコにスサノヲに協力し国作りすることを命じる。またオホクニヌシが兄弟に殺されたとき、彼を生き返らせたのもカムムスヒである。『古事記』をみると以下のようである。

故爾くして、神産巢日御祖命に白し上げしかば、答へて告らしく、「此は実に我が子ぞ。子の中に、我が手僕よりきし子ぞ。故、汝葦原色許男命と兄弟となりて、其の国を

作り堅めむ」とのらしき。故爾より、大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神、相並に此の国を作り堅めき。8)

故爾くて、八十神、いかりて大穴牟遲神を殺さむと欲ひ、共に議りて、はくきの国の手間の山本に至りて云はく、「赤き猪、この山にあり。故、われ、共に追ひ下らば、汝、待ち取れ。若し待ちとらずは、必ず汝を殺さむ」と、いひて、火を以て猪に似たる大き石を焼きて、転ばし落しき。爾くて、追ひ下り、取るときに、即ち其の石に焼きつけられて死にき。爾くて、その御親の命、なきうれへて、天にまい上りカムムスヒの命に請しし時に、乃ちきさかひひめとうむかひひめを遣して、作り活けしめき。9)

このようにアマテラスがタカミムスヒのエネルギーに導かれているように、スサノヲはカムムスヒのエネルギーに導かれている。ムスヒの役割について神野志隆光は次のように指摘している。

ムスヒはまず冒頭の神々の生成をあらしめ、さらに、高天原と地上＝葦原中国とにわたって、タカミムスヒとカムムスヒとに分かれて浸透しそれぞれの世界を成り立たせていく。タカミムスヒ・カムムスヒは役割を分担するかのよう、あらわれるところは区別される。タカミムスヒは高天原の側にかかわり続け、カムムスヒは地上側に関与していくことは見て明らかであろう。10)

この文からも分かるように、タカミムスヒはアマテラスの助力神として、カムムスヒはスサノヲの助力神として、高天原と地上の完成に関わっている。アマテラスとスサノヲ、両方の神ともムスヒのエネルギーを享受しているのである。

4 国譲り

スサノヲの子孫がオシホミミの子であるニニギに国譲りする場面は百済の始祖である温祚が類利に国譲りしている場面と酷似している。ここで急に百済の神話と日本の神話とを比較する前に、百済の神話がたして日本の神話に影響を与えているのか、比較する意味があるのかを検討する必要があると思われる。そのためまず両国が歴史的にどのような関わりをもっているのを考察したいと思う。そこで『古事記』が書かれるに至った背景に日本の国家秩序の成立があったと見なし、当時の両国の関係を探ってみることにする。

弥生時代以降、戦乱あるいは他の理由によって大陸の人々は絶えず倭国に移住しているが、中でも五世紀には倭国の統一と大王政権の外来文化の積極的な導入のため、大

8) 権오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.241.

9) 権오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈원, 2007, p.197.

10) 神野志隆光 『古事記』 NHKブックス, 1995年, p.38.

陸からの移住が最高潮に達する。

当時の渡来人が日本にもたらした影響について、鈴木靖民は次のようにのべている。

五世紀から六世紀にかけての時代、渡来人の技術と意識が倭の政権の伸長に強い作用をおよぼし、その古代国家形成過程上の基礎をなすような多大な役割を果たすものであった。11)

中でも百済と日本の関係はどうだったのか。『日本書紀』に次のような記載がある。

応神天皇十四年の春二月に、百済王が縫衣工女を貢上した。名を真毛津という。これが今の来目縫衣の始祖である。この年に、弓月君が百済からやってきた。そうして奏上して、「私は自分のくにの人夫百二十県分を率いて来帰しました」12)

雄略天皇七年 天皇、群臣たちにみことのりして曰く、「然らば、歎因知利を以て、弟君等にそえて、道を百済に取り、併せて勅書をたまいて、巧みの者をたてまつらしめよ」とのたまう。13)

上記の伝来物の中でも儒教の導入が日本古代国家の成立に果たした役割は大きい。それについてみると、『古事記』応神の条に次のような記録がある。

百済国におほせ賜ひしく、「若し賢き人有らば、献上れ」とおほせたまひき。故、命を受けて献上りし人の名は和迩吉師。即ち論語十卷・千字文一卷、併せて十一卷を、是の人に付けて即ち貢進りき。14)

この記録は儒学導入に関しての最も古い記録であり、和迩吉師とは王仁のことである。

王仁が将来した論語は、孔子の言行録、儒教の経典で帝王の治天下の指針書でもあった。大王政権の直面する任務、即ち統一国家の樹立には欠かせないものであった。

このように日本の古代国家の成立期の日本・百済の関係はとても密接なものであった。

大陸の文化が百済を通じて日本に入ってきたことを思うと、両国の神話に多くの共通点があるのは決して偶然ではない。このような事実を前提とし、百済と日本の神話は互いに比較し得るものだと思う。

11) 鈴木靖民『増補 古代国家史研究の歩み』新人物往来社、1983年、p.253。

12) 『日本書紀』1 日本古典文学大系、岩波書店、1967年、p.370。

13) 『日本書紀』1 日本古典文学大系、岩波書店、1967年、p.474。

14) 권오엽, 권정 읍김 『古事記』 중, 고즈원, 2007, p.383。

それでは本論に戻って、スサノヲの国譲りと百済のそれに見える共通性を検討し、その類似性が意味するものとは何なのかを考察していきたい。

最初に温祚による国譲りについて考察していく。温祚はもとは高句麗の始祖である朱蒙の息子として生まれ、高句麗の正当な跡継ぎとしての資格をもった王子であった。しかし朱蒙は他にも息子がおり、この息子がいる日突然彼を訪ねてくる。『三国史記』に次のような記述がある。

瑠璃明王が即位した。諱を類利あるいは孺留といい、朱蒙の長男で、母王は礼氏である。むかし朱蒙が扶余にいたとき、礼氏の娘を娶ってみごもらせた。朱蒙が旅立った後、子供が生まれた。この子を類利とした。幼少のころ、路上で雀を撃って遊んでいた。ところが謝って水を汲みに来た婦人の水がめを壊した。その婦人が罵って言うには、「この子は父がないので、こんなに頑なのだろうか」と。類利ははじて家に帰り、母に「私の父はどなたで今どこにおいでになりますか」と問うた。母は、「おまえの父は普通の人ではありません。この国に容れられず、南方に逃れ、国を開き、王となられた。亡命するとき、わたしに次のように言われた。もし男の子を生んだならば次のように言いなさい。わたしがあるものを残していきます。それは七稜の石の上にある松の下にしまっています。もし、それを見つけて出すことができれば、その子こそわが子です」と。類利はこの話を聞いて、山や谷にこれを探し求めたが、得ることができず、くたびれ果てて家に帰った。ある朝、家にいると、柱の礎石のあたりから声のようなものが聞こえてきたので、それを頼りにいってみると、礎石が七稜あったので、その柱の下を探して、断剣を一部得た。そこでこれを持って卒本にゆき、父王にあって断剣をさしだした。王が自分がもっている断剣をとりだし、これを合わせると、つながって一剣になった。王はこれをよろこび類利を太子にたてた。この時になって王位を継いだ。¹⁵⁾

以上のように、類利は自分の父親がだれであるのかを母に問いただし、自分が朱蒙の息子であることを聞かされることになる。そして父である朱蒙が息子が生まれた場合、自分が隠した剣を探しだし、訪ねてくるように言い残したことを知る。結局、類利は自分が朱蒙の息子であるという証であるその剣を探しだし、朱蒙に会うため高句麗に向かうのである。

彼が高句麗に来ることによって朱蒙の跡継ぎとされていた二人の兄弟は、類利に王位を譲り渡し、高句麗を後にして新しい国を建立させる。二人の兄弟の中で温祚が建立した百済だけが立派な国として栄える。

この神話で注目すべきことは、類利と温祚の間に王位をめぐる争いはなく、二人の王子は腹違いの兄弟である類利に王位を譲り渡すことである。そして朱蒙も後に生まれた二人の息子より類利が自分の跡継ぎに相応しいと判断し、彼に国を譲り渡す。これは長男を優先

15) 『三国史記』2 東洋文庫、平凡社、1988年、p.11.

する儒教思想に基づく判断だと思われる。この神話とオホクニヌシの国譲り神話には、偶然とは思えない共通点がある。次の三点がその共通点である。

- ①朱蒙の血を引く類利が扶余から来ることによって、温祚兄弟は王位を奪われ高句麗から追われるように、オシホミミの息子であるニニギが高天原から降臨することによって、スサノヲ系の神たちは葦原中国を追われることになる。
- ②葦原中国から追われたオホクニヌシは、高句麗から追われた温祚が百済という新しい国を得るように、「とだる天の御巢の如く富み足る宮殿」を得ることになる。
- ③類利とニニギは、新しい国に行きその国の統治者となるが、その時二人とも剣をもって出向いている。

以上の三つの共通点を偶然によるものではなく、両国間の影響関係によるものと見たとき、朱蒙とスサノヲを同立場で論じることができる。つまり温祚と類利が朱蒙から同じ血を受けた兄弟であるように、オホクニヌシとニニギもさかのぼれば、同じくスサノヲの血統を受け継ぐ神だということである。このような事実を考慮したとき、なぜ温祚とオホクニヌシが抵抗なしで類利とニニギに国を譲ったのか説明できる。つまりその理由は「同じ血統を有する者同士」だといえる。上の共通点について考察していく。

温祚は高句麗の後継者であったが、朱蒙に国を譲り、新たに百済という国を建設するに至る。その様子は次のようである。

百済始祖の温祚王。その父の鄒牟、別名朱蒙が北扶余から避難して、卒本扶余にいた。扶余王には子がなく、ただ三人の娘がいた。朱蒙をみて非凡人であることを知り、二番目の娘を嫁がせた。その後しばらくして、扶余王が死去し、朱蒙が王位につき、二子をもうけた。長男を沸流といい、次男を温祚と叫んだ。朱蒙が北扶余にいたころの子が来て太子になった。沸流と温祚とは、太子との対立を恐れて、南方に旅立った。(中略) 温祚は河南の慰礼城に都をおき、十人の家臣が助けたので、国号を十済と叫んだ。

(中略) その後百姓が楽しみ従ったことに由来して、国号を百済と改めた。¹⁶⁾

このように温祚は腹違いの類利が父を求めて来たときに、かれと王位を争うよりは、新しく国をつくる方を選択するのである。同じことが国譲りをしたオホクニヌシにおいても言える。オホクニヌシは「この葦原中国は命の随に既に献らむ」といって、ニニギに譲り渡すことを承諾する。そして温祚が新しい国を得たように住居を要求し、そこに祭祀を行うことを約束させるのである。『古事記』によると次のようである。

16) 『三国史記』2 東洋文庫、平凡社、1988年、p.272。

僕が子等二はしらの神が白す随に、僕は、違わじ。此の葦原中国は、命の随に既に献らむ。唯に僕が住所のみは、天つ神御子の天津日繼知らすとだる天の御巢のごとくして、底津石根に宮柱ふとしり、高天原二永木たかしりて、治め賜はば、僕は、百足らず八十くまでに隠りて侍らむ。17)

また三つ目の共通点があつてもつ意味も重大だと言える。それは類利とニニギが王位を継承するにあたいする資格を持っていることを宝剣をもって証明しているからである。それでは次に各宝剣が元来どのような経緯を経て類利とニニギの手に入ったのか、そしてそれが持つ意味は何なのかを検討していく。

* 類利の場合

類利の父である朱蒙は、日光受精による卵生だったため、父親を持たない。扶余の王である金蛙王にひろわれ、扶余の王子たちと一緒に育てられる。しかし、いつも朱蒙の才能を妬む王子たちに迫害され、生命の危機を感じた朱蒙は扶余を離れ高句麗という新しい国を建立することになる。だが、扶余には自分の子を身ごもった妻がおり、彼女がもし男の子を生んだ場合、自分の子であることを証明できるように隠された剣を探しだし、それを持って自分を訪ねてくるよう言い渡す。妻は結局男の子を生み、彼が成長したときに父親の存在をしらせる。そして類利は剣を探しだし、高句麗へと父を求めて出向くことになる。朱蒙は息子であるとの証である剣をもった類利を跡継ぎとして認め、高句麗の継承させる。

* ニニギの場合

ウケヒに勝ったことを喜び乱暴を働いたスサノヲは、高天原から追放され出雲の国に降臨する。その時、スサノヲは大蛇に命をねらわれているクシナダ姫に会い、蛇を退治できたらその姫と結婚することを約束される。その大蛇を退治したとき、お腹からクサナギの大刀を得、その大刀をアマテラス大御神に献上する。その後、クサナギの剣はニニギの降臨の際に鏡、玉と一緒にアマテラスによってニニギに授与される。その様子を『古事記』に見ると以下のようなようである。

しかくして、スサノヲの命、其のみはかしせる十拳の剣を抜き、其の蛇を切り散らししかば、ひのかわ、血にかわりて流れき。故、其の中の尾を切りし時に、御刀の刃、こほれき。爾くして、怪しと思ひ、御刀の前を以て刺し割きて見れば、つむ羽の大刀あり。故、此の大刀を取り、異しき物を思ひて、アマテラス大御神に白し上げき。これは、草那芸之大刀ぞ。18)

17) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 중, 고즈원, 2007, p.294.

18) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 중, 고즈원, 2007, p.167.

ここに其のをきし八尺の勾玉・鏡と草那芸劍と、また常世思金神・手力男神・天石門別神を副え賜ひて、のりたまひしく、「此の鏡は、専ら我が御魂と為て、吾が前を拝がむがごとく、いつき奉れ」とのりたまひ。19)

上の二つの神話は、ニニギと類利が新しい国を統治するため母神のいる国を離れるとき、劍をあたえられるという点で共通している。韓日神話の影響関係を考慮したとき、与えられた劍はニニギや類利がその国の統治者の子孫として王位継承の正当性を持っていることを保証してくれる証だと言える。つまり類利にとって劍が王位継承の象徴的な品であったように、ニニギにとってもスサノヲの劍は王位継承の物的な証だったのである。三種の神器のなかで、鏡と玉がアマテラス関係を宝物だったのに対して、唯一クサナギの劍だけがスサノヲ関係の宝物だということも、その事実を裏付けている。劍が王位継承の象徴だと言うことは三品彰英によっても論じられている。

実際、神劍の授受が王位継承の一つの儀礼であったことは、中国、日本で等しく行われていたことであり、かくて類利の君長たる実力のよってきたる宝劍こそ、父祖なる扶余朱蒙の威靈を宿せる、いわば夫妻の靈劍であった。20)

この引用文から推定できることは、ニニギのクサナギの劍もスサノヲの威靈がやどるものだったということである。さらに三品は次のように語っている。

宝劍が王位継承の象徴として使用されていたことは、かの父王の宝劍を得て、王位についた類利王のそれに見たが、その他、漢の高祖の斬蛇劍は珠玉の宝器とともに太子即位の際に授けることになっており、なかんづく后者の例は、ちょうど我がムラクモノ劍が三種の神器の一つとして皇位継承の瑞であるのと軌を一にするものである。21)

三品の説のごとく父から受け取った劍が王位継承の象徴であるならば、スサノヲの劍も王位継承の象徴であったことからわかるように、スサノヲはオシホミミにとっては父に、ニニギにとっては祖父にあたる存在であったということになる。

つまり葦原中国の統治の正当性を有するニニギはスサノヲの血統を受け継ぐもので、スサノヲの劍をもってそれを証明しているのである。

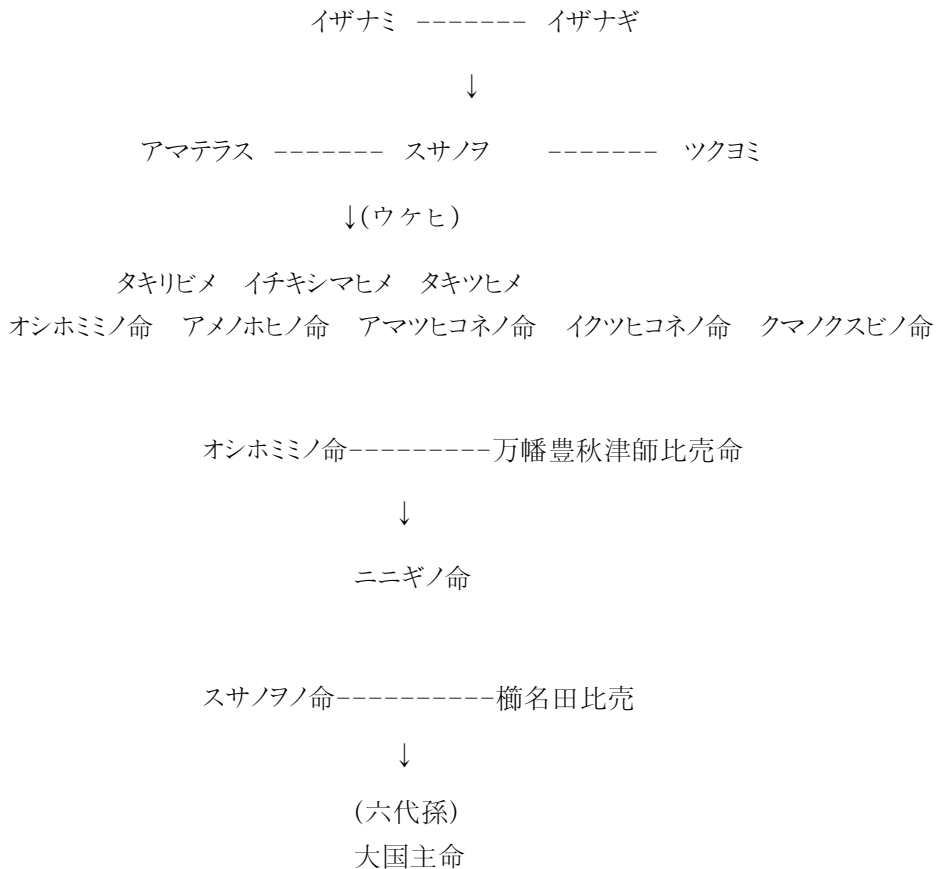
19) 권오엽, 권정 옮김 『古事記』 중, 고즈윈, 2007, p.301.

20) 三品彰英 『日鮮神話伝説の研究』、平凡社、1972年、p.25.

21) 三品彰英 『日鮮神話伝説の研究』、平凡社、1972年、p.146.

結論

今まで皇祖神であるオシホミミはアマテラスを母親とし、スサノヲを父親として生まれた神だということを論じてきた。このような論点を持つようになった理由は、アマテラスとスサノヲは同じイザナギとイザナミの子として生まれたにもかかわらず、姉神であるアマテラスが尊い存在として皇祖神に敬われているのに比べ、弟神であるスサノヲは荒ぶる神、乱暴を働いて高天の原を追われた問題神をして見られてきたからである。アマテラスとスサノヲの系譜を図式化すると次のようである。



上記の図から分かるように、オシホミミはアマテラス一神の力で生まれた神ではなく、スサノヲと一緒に成らせた神である。またニニギとオオクニヌシもさかのぼれば、同じくスサノヲの系

譜を受け継ぐ存在なのである。この事実はスサノヲに対する今までの評価を再考させるものではないか。つまりスサノヲもアマテラスと同様にオシホミの父親として皇祖神としての資格を十分に備えている。

『古事記』が天皇の正当性と神聖性を保証するために製作されたのであれば、高天原から地上までをも含む秩序を有する神聖な存在であり、抽象的な存在であるアマテラスを母とし、巨大な力をもって実際に国作りに関与するスサノヲを父としてこそ、オシホミは皇祖神として相応しい資格を備えたと言えるのである。

【参考文献】

- 『三国史記』2 東洋文庫、平凡社、1988年、p.272.
권오엽, 권정 옮김 『古事記』 고즈윈, 2007年, p.145.
金子武雄 『古事記神話の構成』 桜楓社、1976年、p.59.
神野志隆光 『古事記』 NHKブックス、1995年、p.38.
中西進 『日本神話の世界』、平凡社、1991年、p.40.
三品彰英 『日鮮神話伝説の研究』、平凡社、1972年、p.25.
吉田敦彦 『日本神話の特色』 青土社、1989年、p.75.

要 旨

本論文は今までのスサノヲの位置づけを見直そうと試みたものである。スサノヲおよびその子孫たちははその荒ぶる性格ゆえ高天原を貫く秩序を有するアマテラスの子孫であるニニギに、造り終えた葦原中国を譲渡するのが当然であるかのように論じられてきた。だが、本当にスサノヲには皇祖神たる資格がないがゆえに国を譲らざるを得なかったのであろうか。

アマテラスとのウケヒの場面を見ると、ニニギの父に当たる三尊子、オシホミミはアマテラス一神の力で成った神ではない。スサノヲがアマテラスの勾玉を噛み砕いて成らせた神なのである。

その誕生はスサノヲの力なしではあり得なかったと言える。このような神生みはイザナギとイザナミの場合においても言え、アマテラスとスサノヲはイザナギの目と鼻から生まれたにも関わらず、イザナミを母神と認めている。さらにニニギが天降るとき持っていく宝物の中には、アマテラス系の鏡と勾玉以外に、スサノヲの宝剣であるクサナギの剣も含まれている。

剣はむかしから王位継承の象徴とされてきた。高句麗の類利の神話から分かるように、剣は自分がその国の後継者であることを証明してくれるものである。朱蒙もその剣をみて、類利を後継者と認め国を譲り渡している。スサノヲの場合もこのような観点で見ることができる。スサノヲの六代孫である大国主とニニギは系譜をたどれば同じくスサノヲの血統を引くもの同士であり、それも国譲りの一要因になっているのではない。つまりスサノヲもアマテラスと同様にオシホミミの父神として皇祖神としての資格を十分に備えている。

『古事記』が天皇の正当性と神聖性を保証するために製作されたのであれば、高天原から地上までも含む秩序を有する神聖な存在であり抽象的な存在であるアマテラスを母神とし、巨大な力をもって実際に国作りに関与するスサノヲを父神としてこそ、オシホミミおよびニニギは皇祖神として相応しい資格を備えたと言えるのである。

キーワード：ウケヒ 国譲り 勾玉 草薙の剣 ムスヒ 兄妹婚 系譜

투 고 : 2010. 5. 31
1차 심사 : 2010. 6. 12
2차 심사 : 2010. 6. 26